

成澤寺かわら版

第14号

発行日

令和2年4月10日

発行



山階高宗時
澤成寺

三内丸山遺跡紀行

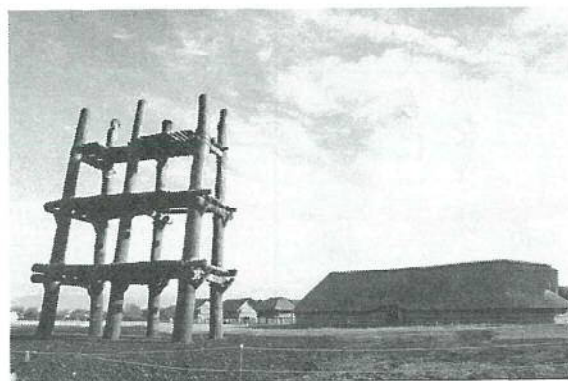
住職

佐々木 勝夫

三月十七日彼岸入りの日、
下北の兼務寺伝相寺を拝みに
行った。

小雪混じりの雨と突風の中
駐車場に車を止めたら本堂の
玄関に先客がいた。檀家の人
です。供物をあげて仏さんを
大事にしてくれている。有難
かった。早速焼香讚から拝み
始めました。先ほどまでのイ
ライラすわした私の気持ちも
御本尊を拝見していたら不思議
にも角が次第にとれ、円満
な気持ちになつてくるから不思議
です。周囲の人とも円満
にやっつけていける気持ちが湧い

てくる。また新しい一年が始
まろうとしています。思えば
伝相寺がここにあることで佐
井の人々も深い恵みをいただ
いてこれられ、その存在感は意
義あるものにしていくれている。
掃除の際には窓際にいつぱい
の虫がかたまり一冬を木の温
もりの中で過ごしたか、虫に
も考えがあることに驚いた。
阿弥陀如来、檀家の先祖代々、
愛宕さんそれぞれに蝋燭とお
線香を焚き、拝む。彼岸に来
れてよかった。お墓はと見る
と数墓には花が手向けられて
いる。やはり堅く守られてい



三内丸山遺跡

るを見て安心。掃除をする。突
風がすごい。局地的なものがあ
る。人に出会えたこともよかつ
た。いよいよ今年も始まる。見
覚えがあるのか頭を下げてお辞
儀する人あり。本堂前には昔、
海に出ている船乗り達は帰る時
伝相寺の庭に今はないが昔は高
さが三〇呎、幹のまわり三呎も
ある杉の木を目指して港に帰つ
てきたものだと言っている。同
じことを青森市郊外の三内丸
山遺跡四千五百年前にも巨大
木柱が数本建ち、この巨木を
目指して縄文時代の漁

民は海の漁を終えると小船で
帰ってきたと推理されています。
必ずなにか目に見えるものを方
向探知機にして古代も今も変わ
らずに帰還している。高さ二十
呎という、柱はクリ材。高床式
の食糧倉庫も数十棟、住居群の
地区から谷ひとつ離れて共同墓
地が出てきた。ある大学の考古
学の先生の講演時の録音を聞い
たことがあります。縄文人の生
活は居住群を中心にして、これ
を大事にするはもとより、もつ
と大事にしたのが周辺部である
といっている。広大な周辺部に
は採集する実のなる木をたくさ
ん植えている。樹木も多く植え、
動物が住めるようにしている。
矢じり、手斧を作る工事現場を
持ち、川を流し魚を捕る。
そのような周辺部を大切にしてい
たという。あたかも自分達の
庭なのであった。おそらく天空
も太陽、月、星を眺めて時節を
知る広大な空間をも自分達のも
のとしていたであろう。話は少
しづれますが、古代東北の住人
エゾの民を支配すべく坂上田村

麻呂軍は東北に来た時、奥州の山々に住んでいるエゾ人達は非常に怒った。なぜかといえは山々に鎮座する神々を蹴散らしたからだという。これも山に住む住人達にとつては山そのもの、神そのものも自分達の所有物だからでありましょう。また元に戻ります。山内丸山です。谷には食べかすのクジラ、タイ、ヒラメなど海産物が多かったです。(今でもタイ、ヒラメは捕れている)丸木舟で捕ったものでしょう。今でも採集生活の跡は山菜の採集の仕方、米は採れないので畑に芋を収穫して、その芋も各家々で形、味が違うというこの辺も何かしら古代の臭いがしないでもない。帰路、小川原湖に立寄る時もあり、湖の岸辺に立て看板立てり。何と書いてあるかといいますと、この湖の底から虎の骨が出たとあります。古代この辺には虎が棲んでいたという。また北海道の夕張や襟裳岬からはマンモスの化石が出ています。昔は大陸と北海道、本州は繋がっていたので様々な野獣

が往来していたようです。そういえば向こう岸の山の木々は古代水河期の風景に似ている。易国間(いこくま)という地名、下風呂(しもほうろ)という地名みなアイヌ語。江戸初期まで下北半島にはアイヌ人が住んでいたところ。ただオホーツク寒気団による「(やませ)」により夏でも冷風、曇天が続き、米は作れませんがアイヌ人は米を作らない民なので気にしないものであったかとも思う。

佐井の港の建物の玄関口に三上剛太郎という人の石碑が建てられております。その説明を読みますと日露戦争の時、負傷者を包帯所に集め手当てをしてあげた。その時、その場所に自分が持っていた赤の毛布と白の布を切り取り赤十字を作り掲げた。ロシア兵一人も手当てしてやっていたので、コサ



三上剛太郎



手製の赤十字旗

ツク兵に取り囲まれ全滅の危機にあうも何一つ攻め込まれることなく終わったといえます。今はその快挙を祝し、村の標語として赤十字の旗ひらめく里として人にやさしくする社会を目指している。このことももつと底を極めればアイヌの民の精神を継承しているのではないか、私流に解釈してお

ります。建物の階段口には蝦夷錦という模様の布が飾られている。これは、昔大陸と蝦夷が交流していた時に北方から渡ってきたものといわれております。そして、その次の階には堅い木を彫つて磯の舟と呼ばれる木造船の写真があります。アワビ、やりイカ漁が盛んな頃の舟、中国、関西方面に売っていたといわれます。下つて東通り村、尻屋崎では砂鉄が採れた。海岸に黒く固まりがあつたという昔から、豊かな土地柄であつたのであります。

南部、津軽、下北、多様性がありロマンがあり、魅力に富んだ土地であります。今、縦貫道建設が忙しいが各地の特性は忘れてはならない。

川柳

災害に

涙なき様

祈る初春はる

岳春

暖冬を

是これで良いのか

月に問とう